

地域を知ることに関する基礎的研究

—モノガタル地図づくりを通して—

内田文雄（理工学研究科大学院教授） 岸田匡平（感性デザイン工学専攻）

Study on “finding the local area” -Through making “a narrative map”-

Fumio UCHIDA (Graduate School of Science and Engineering)

Kyohei KISHIDA (Graduate Student, Graduate School of Science and Engineering)

The purpose of this research is to clarify the meaning that an area-planner knows the area in a true meaning.

“A narrative map” was made from the cooperation of labor work with the area populace. And it is a case study of knowing the area.

To make the map is to know the relation between the history and the place, and to understand what has been transmitted by stating orally. It is a means to know the area deeply.

Key Words: *Area study, narrative map, peculiar to the area*

1. はじめに

地域で継承されてきた文化や生活環境、生業などは具体的な土地の上で展開される人間の営みによって生まれ、育まれて来た。これら地域固有の資源は、人間がその地域に住み着いてから、暮らしの中で磨き、積み上げてきた智慧である。その智慧は人間が活動することによって、自然と暮らしとの応答の中で、継承されてきた。

近年の、経済的尺度を優先した効率追求型社会によって、地域に継承されてきた智慧を顧みない画一的かつ暴力的な計画に基づく整備により、地域社会は崩壊の危機に瀕している。それは地域計画において、「住民の暮らしからの視点」が抜けてきたからに他ならない。そのことに地域住民から反発・反抗のかたちで「まちづくり」が生まれ、現在まで各地で多様なまちづくりが試みられてきた。現在、地域計画における計画の進め方の理念として、住民参加・協働のまちづくり、歴史文化を継承していくま

ちづくりなどが重視され始め、行政・計画者と地域住民が一体となって、まちづくりに取り組む事例が増えている。そこでは、地域にある固有の資源に立脚した地域づくりを行い、「地域を知る」ことをベースとして、地域づくりが行われようとしている。しかし計画によって参加の度合いなどに、ばらつきがあり理念が形骸化している事例も多く見受けられる。

そこで本研究では地域計画において「地域を知ること」が、地域計画者にとってどのような意義があるかを、ケーススタディを通して明らかにすることを目的としている。

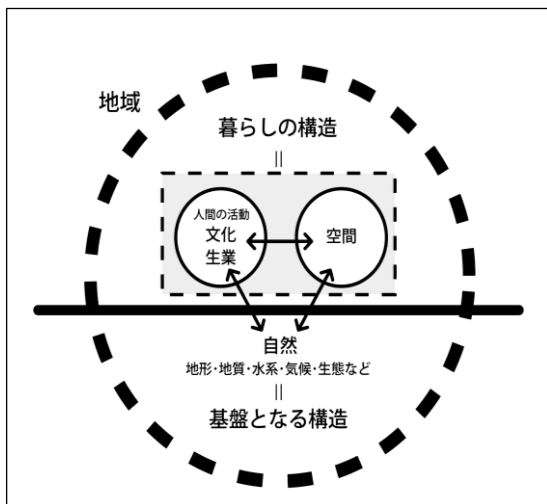
2. 「地域を知ること」

我々人間は、ある固有の場所の上に暮らし、様々な活動を展開している。それは、基盤となる構造である自然（地形・地質・水系・気候・生態など）の上に、糧を得る場所や住む場所を選択し、生業を営み文化を築いてきた。同時に、住居としてあるい

は集落として空間を獲得しながら、暮らしの構造を築いてきた。これら全てを含んだ場所を「地域」と捉える。

また人間は、人間どうしの交流を通じて子孫を残し、人間がその地に暮らし続けることによって、地域に時間の概念が生まれ、人間が地域に関わったという痕跡を積み重ねながら、固有の地域がつけられてきた。さらに、人間と人間との関係、あるいは人間と自然との関係で、地域に暮らすものどうしが様々な活動を行い、地域の暮らしの仕組み・技術・文化が生まれ、地域の場所に様々な意味が加えられることとなった。そうして加えられた「意味すること」が、人間と時間との関係によって、地域に積層しているといえる。

本研究では、「地域を知ること」を、表面的な「地域を知ること」だけではなく、この時間概念を含んだ、「意味すること」を含めて「地域を知ること」と考える。



3. モノガタル地図づくり(図1 地域概念図)

「モノガタル地図」づくりは、特定の地域において、地域でしか描けない地図のことで、地域の暮らしを聞き取り、「場所」と「暮らしの物語」の関係を地図上に描いたものである。そのプロセスは以下の通りである。

(1) 文献調査による地域情報を読み取る
その地域に生活していない人間にとって、まず、文献資料に基づいてその土地の歴史や人物史、地理などの客観的事実を知るこ

とは、地域の方々と話をするきっかけの材料となる。歴史、民俗、民話などの意味情報がフィールドワークに活かされる。

(2) フィールドワークによる読み取り
その土地を歩き回ること、フィジカルな状況を把握し、文献整理したことを3次元的に理解する。計画者にとって、場所の持つ潜在的な力を身体を使って読み解くことで、地域の暮らしの構造が把握できる。

(3) ヒアリングによる読み取り
フィールドワークで発見したことを、地元で丁寧に話を聴くことで、場所のもつ意味や歴史・伝説などを知る。自分の気になることだけでなく、住民の地域への思いを聴くことで、意味することの重みづけを知ることができ、記憶の重なる度合いを知ることによって地域を深く理解することになる。

(4) モノガタル地図づくり
具体的な場所と人間の暮らしは繋がっており、ヒアリングの言語化のみでは、場所と物語の関係がわかりづらい。場所とそこで語られる記憶や物語を一体として捉える「モノガタル地図」を地域の方々と協働作業で作ることで、地域を深く知ることとなる。また、モノガタルを重ね合わせることで地域の記憶が読み取れ、「地域の意味すること」を把握することとなる。

モノガタル地図づくりは、「地域を知る」手法であると同時に、「計画者と地域住民相互のコミュニケーションを促進する」手法であるとも言える。また、道を尋ねるように記憶を聴きだす行為は、相手を自然に地図づくりへ導き、そしてその先の地域づくりへつながる可能性のある行為である。地図を作る過程で、聞きだした記憶の上に、記憶を重ね続けるため、終わりのない地図づくりであり、地図が進化していく。また、正確な歴史を把握することに主眼が置かれているのではなく、地域の人が自分たちの地域をどのように見ているかを確認していく作業である。

4. ケーススタディ

以上のような考え方にに基づき、ケーススタディとして山口県宇部市吉部地域で「モノガタル地図」を作成した。吉部地域は、1時間圏内に山口宇部空港・新山口駅・美祿IC・宇部市街地・山口市街地がある所に位置し、米づくりを基盤にした典型的な

中山間農村地域である。人口は全盛期の3500人から今は1000人弱となっている。

以下「モノガタル地図づくり」で把握できたことについて整理する。

(1) 吉部地域は船木街道の準宿場町として栄えたこと

吉部地域は大田と舟木の二つの栄えた宿場町の間地点という位置条件により、宿場町として栄えた。「女と子供、体力の無い者は吉部に泊まっていた。」と口承が伝わっている。

水系を辿ると小野地域に行き着くが、旧街道のつながりから、現在でも万倉地域・船木地域との関係が深く、3つの地域合わせて桶地域が構成されている。(図2)

吉部地域は、江戸時代までは、農を中心とした集落であったが、街道の往來の増加に伴い、集落の一つは宿場町として栄え、そこでは、商売を生業とする地域へと変わった。その後、明治から戦前にかけては、さらに商売のお店や職人のお店が集まり、近隣の集落からも買い物に来るようになった。交通が発達していない時代は商売だけで成立していたが、戦後、高度経済成長と共に、人口流出が始まったり、商売をしていた次の世代は、跡を継ぐこと無く、地域を離れるか、農業を始めた。

昭和55年頃には、新しい県道沿いに数件お店は移っていくが、次第に中心地はさびれ、商売はほとんど姿を消してしまった。

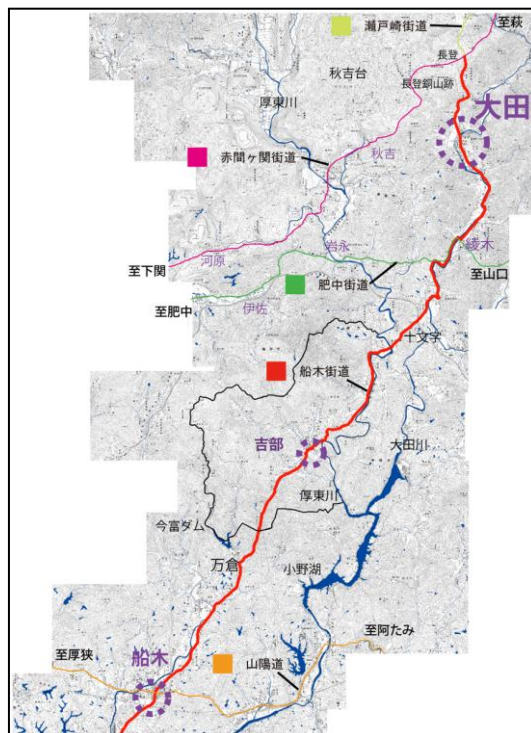
(図3) (図4)

(2) 豊かな自然を活かし、米作りを基盤として暮らしてきたこと。

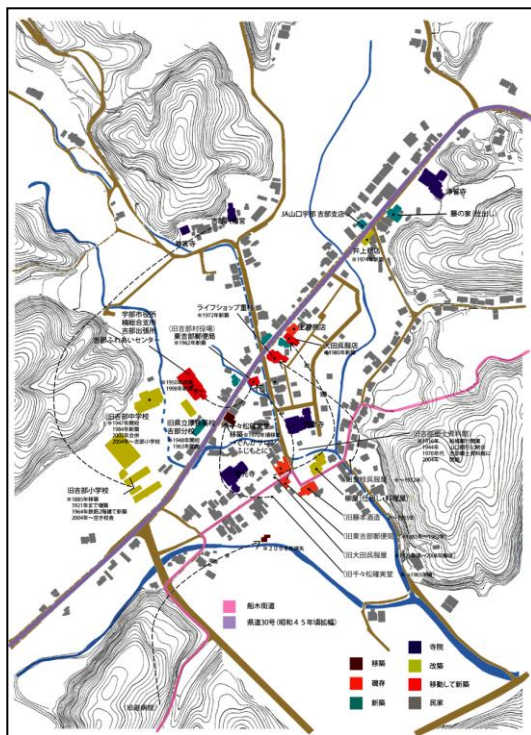
谷すじに流れる厚東川の支流に沿って、それぞれの小集落が形成されており、川と土地を利用しながら耕作地を広げていった。支流が集まる中心地に広い水平面がとれ、戸数も多い。地質は粘りのある赤土で、その下に岩が堆積しており水はけがよく、米づくりに最適であるため、田んぼに利用されている。(図5)

(3) 吉部地域には荒滝山を居城として、「内藤隆春」が暮らしていたこと

吉部地域は鎌倉時代に、内藤隆春が地域を



(図2 船木街道周辺図)



(図3 吉部宿場町付近変遷図)

治めていた。それゆえに地域住民は、今でも、荒滝山の山城、今小野地区の城下町としての歴史的な物語を語ることを好む。今小野地区では門名が聴き取れ、当時の面影を感じることができる。また郷土料理のい

われも内藤氏とゆかりがあり、地域に影響を与えていることが確認できる。(図6)

(4) 吉部地域へ継承されてきた文化への愛着があること。物語を聴く過程で、地域の人々が何を大切にしながら暮らしてきたか、また暮らしの知恵・教えを聴き取ることができた。お互いが助け合う暮らしとして、ある集落では女性と男性が協力しあい、郷土料理を復活しその収益を元に集会所を作ったことが聴き取れた。また、一度途絶えてしまった歌舞伎を村芝居として復活させ、地域のお祭り時に上演するなど、文化を継承保存する活動への取り組みが始まっている。

以上、モノガタル地図の作成過程で4つのことが把握できた。これらは、吉部地域の重要な資源であり、同時に特定の場所の中で形づくられて来た固有の事実であるといえる。「地域を知ること」、地域の深層にある固有性が抽出することができたといえる。

5.まとめ

本研究を通じて地域居住者と協働して「地図づくり」を進める作業の過程で、地域の「意味すること」発見し、「地域が大切にしてきたこと」を探ることができた。

モノガタル地図づくりを通して、その地域の表層としては見えにくい独自性が明確に出来たといえる。

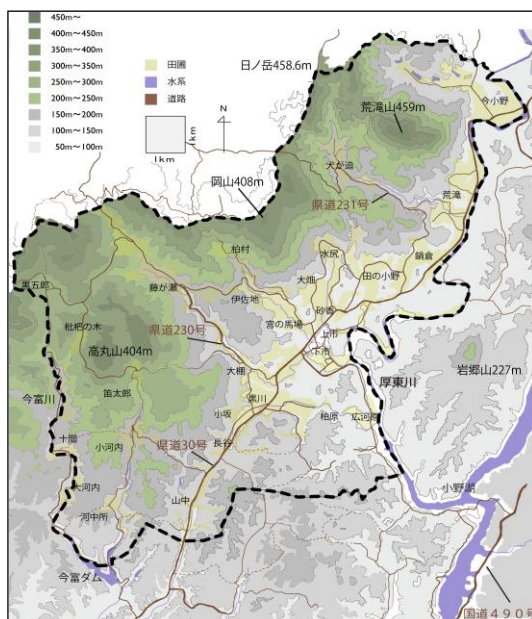
今後、地域づくりのための有効な計画は、計画に携わる専門家が、地域住民と協働して行う。これらの作業を通して発見出来たものの上に展開する必要がある。その具体的な計画の展開手法については、今後の課題としたい。

参考文献

- 1) まちづくりオーラルヒストリー 後藤春彦 水曜社
- 2) 地元学とはなにか 語城登美雄他 現代農業農文協
- 3) 「創造的である」ということ上・下 内山節 農文協
- 4) ワークショップ 木下勇 学芸出版
- 5) 吉部郷土史話 吉部郷土史話研究会



(図4 下市通りモノガタル地図詳細)



(図5 吉部地域地形図)



(図6 今小野地域モノガタル地図部分)

(平成22年 1月13日 受理)